

目次

謝辞

iii

序文

I

第一部 オーストリア学派とそれに敵対する学派——歴史主義・社会主義・実証主義

19

第一章 メンガーの『国民経済学原理』

21

- 序奏——カール・メンガー、教授になる 21 『国民経済学原理』のテーマ 25 メンガーの主観価値
理論 31 メンガーの弟子たち 34 いくつかの解釈問題 37 『国民経済学原理』の受け止めら
れ方 43

第二章 ドイツ歴史学派

47

- ドイツ歴史学派が台頭した背景 51 シュモラーとドイツの新歴史学派 58 社会政策学会
帝国ドイツにおける社会政策 69 グスタフ・シュモラー——帝国ドイツの教授メーカー 74

第三章 方法論争

77

- 『社会科学、特に経済学の方法に関する研究』 78 方法論争 90 余波 95

第四章 マックス・ヴェーバーと歴史学派の凋落

101

- 価値自由論 101 「前提のない」科学の不可能性 108 ドイツ歴史学派の実際的な失敗 112

結論 118

第五章 実証主義と社会主義 121

- 衛兵交替 121 マルクス主義と限界主義 122 ヨーゼフ・シュンペーターの多数の背信 128 オットー・ノイラート…戦争経済から現物経済へ 138 ルートヴィヒ・フォン・ミーゼスとドイツ語圏の社会主義計算論争 140 社会科学の再建に関するルートヴィヒ・フォン・ミーゼス 144 経済学のオーストリア学派 153

第II部 ハイエクの旅路

第六章 ウィーンの高ハイエク 161

- 家庭と子供時代 161 ハイエクとヴァイザー 172 ハイエクとミーゼス——初対面 175

第七章 貨幣の理論と方法論 183

- アメリカ出張 183 アメリカの経済学に関するハイエクの論文 185 経済学における均衡の役割 188 『貨幣理論と景気循環』 190 結論的な観察結果と今後の予想 198

第八章 ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスのハイエク 201

- ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス 201 ロンドンにやってきたハイエク 209 ケインズとの関わりから『資本の純粹理論』へ 215

第九章 一九三〇年代の方法論争 223

- 制度主義 223 ロビンズ…理論を擁護して 228 第二版…ミーゼス、ロビンズ、ハイエク 234 ハイエクの代替的な歴史 240 テレンス・ハチンスの代替的な方法論 245

第十章 「経済学と知識」とハイエクの転換	251
「経済学と知識」…要約	253
「一部的重要な思想の由来	256
「経済学と知識」の意義	269
前進する道	282
第十一章 理性の乱用プロジェクト	285
計画官と科学人	285
「科学主義」のエッセイ	296
エッセイ「科学主義」の解釈	310
第十二章 個人主義と感覚秩序	321
「感覚秩序」	322
「感覚秩序」の意義	332
方法論的個人主義の再論	344
第十三章 ルール、秩序、進化	355
『自由の条件』	355
『自由の条件』におけるルール、秩序、進化	360
年間 366	
ルールと秩序の遍在性	378
非常に短い迂回——反証可能性に関するポパーとハイエク	383
その後の発展	385
『致命的な思い上がり』の解釈上の謎	390
第三部 ハイエクの挑戦	395
第十四章 旅路の果てに——ハイエクの多様な遺産	397
『貨幣理論と景気循環』	398
ロビンズとハイエク	402
ホモ・エコノミカス…根本的な前提、それと	
もどこにもいる幽霊?	405
「経済学と知識」	413
移行作品としての「科学主義」エッセイ	417
感覚秩序とその他の秩序	419
ハイエクの政治理論	425
文化的進化と群選択	432
複雑な自生的秩序の理論	443

第十五章 エピローグ…二〇世紀の経済学に関する瞑想……………453

経済学の展望に関するハイエクと彼の敵対者……………456 経済学における実証的研究……………458 基本的な経済論理、パターン予測、原理の説明……………468 経済学における状況分析……………474 二十一世紀に向けた若干の代替的な軌道……………485 実証主義を超えて……………487 最後の災難…歴史と方法論の終焉？……………490

補遺A シュモラーによるメンガー著『国民経済学原理』の書評の英訳……………495

補遺B ハイエクの経済学における一九三〇年代の連続性と変化……………497

補遺C ハイエクにおける転換の再論……………509

補遺D ロールシャッハ・テストとしてのエッセイ「科学主義」……………515

陰謀説としてのエッセイ「科学主義」……………516 解釈学としてのエッセイ「科学主義」……………525

監訳者あとがき 科学方法論者が読みといたハイエク……………536

参考文献……………19

索引……………1

序文

ハイエックは謎である。確かに今から二〇数年前の私にとって、彼は謎として始まった。

それは一九八二年の春であった。二・三年前に経済思想史を専攻して経済学の博士号を取得し、助教教授になっていた私は、ニューヨーク大学（NYU）のポスドク研究員として一年目を終えようとしていた。私の論文のタイトルは真面目で学術的な「科学哲学の視点からみた経済学の方法論」というもので、私がNYUにいた理由の一つは、この学位論文を人々が実際に読みたいと思うような本に書き直すことであった。⁽¹⁾しかし私がNYUにいたのは、オーストリア学派の経済学を、より正確には方法論に関してオーストリア学派の特徴的な考え方を学ぶためでもあった。それは主流の経済学者の実証主義的な意見とは著しく異なるだけでなく、彼らを直接に批判していた。とりわけ、ルートヴィヒ・フォン・ミーゼスが主張している、先験主義的というやや奇妙な響きがする方法論のことを、私はもっと知りたかったのである。ハイエックについては、何も知らないも同然であった。

(1) それは結果として『実証主義を超えて：二〇世紀経済科学方法論』（Caldwell [1982] 1994）『実証主義を超えて——20世紀経済科学方法論』中央経済社（1986）という題名の本になった。その第五章は私がNYUに在籍した期間に受けた影響力を最も直接的に明らかにしている。

もしオーストリア学派のことを学びたいのであれば、まさにNYUが最適な場所であった。オーストリア学派経済学の正式な専門プログラムがあり（今でも存在している）、そのための科目やゼミがあり、教員や博士課程を修了した研究員、大学院生などのための資金供与も整備されている。私が在籍していた年の教員にはイスラエル・カーズナー、マリオ・リッツ、ジェリー・オドリスコル、（春には）ルートヴィヒ・ラッハマンが含まれていた。ラリー・ホワイトが非常

勤講師で、リチャード・ラングロウがもう一人のポスドク研究員であった。一ダース程度の学生のなかにはドン・ボードロー、マーク・ブレーディ、サンディ・イケダ、ロジャー・コップル、カート・シュラー、ジョージ・セルギンなどがいた。精神面でも人格面でも威容のある集団であり、私にとっては豊かな経験となった。⁽²⁾

(2) 私にとって最も重要だった経験の一つは、春学期に毎週ルートヴィヒ・ラッハマンと面談できたことであつた。このことは、ラッハマンへの追悼文のなかで触れておく(Caldwell 1991b 参照)。

その春、ジェリー・オドリスコルからテレンス・ハチスンが出した本を手渡され、「ハイエクのUターンに関する彼の主張をどう思うかね?」と尋ねられた。ハイエクは一九三〇年代に「方法的なUターン」を演じたというのがハチスンの主張であつた。より正確に言えば、一九三七年における「経済学と知識」と題する論文の公表は、ハイエクがミーゼスの先験主義的なアプローチから離れて、哲学者カール・ポパーが提起する反証主義的な方法論に向かう動きへ転換したことを示している、という主張である(Hutchison 1981, chap. 7; Hayek [1937] 1948a も参照)。

この主張は確かに私には奇妙に思えた。私は自分の学位論文のためにポパーの思想を詳しく勉強したことがあり、その時にはミーゼスの思想についても詳しくなっていたが、両者の意見が互いに対立しあう様子を考えるのはむづかしかった。一方から他方へと、誰がそれほど簡単に意見を変えられるだろうか? しかし、ハイエクが両者の親友であつたことは明らかである。ハチスンは問題になっている時期を生き延びた思想史家の第一人者であり、自分の主張を裏付けるために詳細な文献を証拠として提示していた。したがって、ハチスンの解釈は謎であり、私が特にハイエクに関して調査を開始したのは、その謎を解くことを試みるためであつた。それ以降ずっと、私はその研究に没頭している。私のことを心配してくれた人たちが、一つのことについてすべてを賭けてはいけなさと警告したにもかかわらずに、私はそうしている。私はこの序文で、このようになってしまった理由を少しでも伝えることができればと思う。

経済学者としてのF・A・ハイエクは、学生生活に入ってから最初の八・九年間はドイツ語で執筆した。それ以降、彼

は少なくとも一九六二年にドイツに転居するまで、主として英語で執筆した。おそらく、新しい言語で意思疎通を図らなければならぬという挑戦に新たに直面したことから、彼はタイトルを選ぶのに非常に気をつかったことだろう。時には、他の著作をほめかしていることもあった。例えば、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）における彼の一九三三年の就任記念講演のタイトルである「経済学的考え方の動向」〔全集Ⅱ・6〕は、それより約一〇年前にアメリカで出版されたレックスフォード・タグウェルが編纂した『経済学のトレンド』を念頭に置いた呼称であった（Hayek [1933] 1991c; Tugwell [1924] 1930を参照）。彼の最も有名な著書に付けられた『隷従への道（*The Road to Servitude*）』（[1944] 1976b）というタイトルは、アレクシス・ド・トクヴィルが使っていた『隷属への道（*The road to servitude*）』という語句からインスピレーションを得ていた（Hayek 1983b, 76）。また私の推測では、彼のフィンリー講演のタイトル「真の個人主義と偽りの個人主義」（[1946] 1948c〔全集Ⅰ・3〕）は、オスカー・ワイルドの『社会主義下の人間の魂』から個人主義に関する一節を引用したものである。⁽³⁾

(3) ワイルドの評論には次の文章が含まれている：「私的財産は真の個人主義を押し潰して、偽の個人主義を樹立する」。後のページには次の一節が見出せる：「私的財産を廃止すれば、我々は本当の、美しい、健全な個人主義を持つことになる」（Wilde [1891] 1931, 12, 13）。ハイエクの講義は一九四五年二月一七日にユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリンで行われた。ハイエクは、聴衆の同国人による著作への間接的な言及があった場合には聴衆の少なくとも一部はそれを理解できると期待できたであろう。

他の場合、タイトルは多種多様な意味合いを持っていた。ハイエクは「方法的なUターン」を行ったというハチンスンの主張をもたらすことになった「経済学と知識」〔全集Ⅰ・3〕という論文はその一つであった。その論文の主題は、経済理論において主体の知識について置かれる仮定であったが、経済学者自身が何を知ることができるかについても論じていた。〔見せかけの知〕（[1975] 1978e〔全集Ⅱ・4〕）と題するハイエクのノーベル経済学賞受賞記念講演も同じように解釈できるようである。本書のタイトル『ハイエク』[Hayek's Challenge] も、ハイエクの手本にならなかったもので、彼

の業績をめぐるさまざまな挑戦を示唆している。

ハイエク自身はもちろん多数の挑戦に直面した。経済学者は悪いニュースの伝道者のポーズをとることに慣れている（「ポーズをとる」と言ったのは、われわれ経済学者が提供するサービスに対する需要は、葬儀屋やセラピストに対する需要と同じく、悪い時期に最も高まるからである）。しかし、ハイエクのポーズは、他の多くの経済学者に比べるとおおよそなものではなかった。彼の意見のなかには評判の悪いものもあった、という言い方では不十分である。生涯のほとんどを通じて、彼の経済的・政治的な立場は他の知識人とはまったく同調していなかった。彼は、社会主義が「中道路線」であると考えられていた時にそれを攻撃したが、その頃には、良心のあるすべての人々が社会主義に共鳴しているように思えていた。彼はケインズ革命を、それが適切に定着する以前にすでに否定していた。実質的にすべての西洋民主主義体制下で何らかの形の福祉国家が存在していた二〇世紀後半に、彼はその哲学的な基盤を提供していた社会正義の概念を批判した。リバータリアン（自由至上主義者）と保守主義者の小グループが彼の著作をいつも熱心に読んでいたが、二〇世紀のほとんどを通じてハイエクは、嘲笑、あるいは軽蔑の対象であり、思想家にとつてさらに悪いことに関心を持たれなかった。⁽⁴⁾ ハイエクはその政治的な意見のゆえに、当代の思想家の間に自分の考えに耳を傾けてくれる人を見出すという挑戦に何度も直面した。⁽⁵⁾

- (4) 例えば主導的な実証主義的哲学者であるルドルフ・カルナップ(Rudolf Carnap)の意見を参照。カルナップはカール・ポパー宛に手紙を書いて、ポパーがある本のなかの謝辞にハイエクの名をあげたことについて、次のように問いかけた：「あなたがフォン・ハイエクに謝辞を呈したことで若干驚いております。私自身は彼の著書『隷従への道』を読んでおりません。この国では広く読まれて議論されてはいますが、賞賛してゐるのは主として自由な企業や無制限の資本主義の主唱者であつて、左翼の誰もが彼のことを反動的であるとみなしています。」(Notturno 1999, 41) 引用元は『The Rudolf Carnap to Karl Popper, 9 February 1946』。

- (5) ハイエクの著書『隷従への道』の要約が一九四五年四月に『リーダーズ・ダイジェスト』に掲載されたことが証明しているように、彼に信奉者がいないわけではなかった。しかし、これはやや逆説的である。というのは、ハイエクは経済学者に対して「賞賛や表彰」の危険性について

警告したばかりだったからだ(Hayek [1944] 1991b, 35-36)。二―三年後に彼は「思想の中古品を取り扱う専門業者」を時として厳しく攻撃したが、それは同時代の評論家や(彼の意見では)偽りの識者が、彼の思想に与えていた低い評価をハイエクが認識していたことを示唆している(Hayek [1949] 1997b, 221)。

ハイエクという存在は彼の思想の解釈を試みている人たちにとっても挑戦である(私もその一人で、本書は『コールドウエルの挑戦』という秘密のタイトルを共有しているのも同然である)。しかし、ここには多数の問題がある。

第一に、ハイエクの著作はオーストリア学派の伝統のなかにある、という単純な事実がある。さて、確かに、一九三〇年代にはその伝統は当時発展途上にあった主流派経済学の一部であった。しかし戦後になると、経済学は変化した。その変化を特徴付ければ、一つには、経済学は戦間期の多元主義から戦後期の新古典主義に変わったといえよう(Morgan and Rutherford 1998)。次に、主流派経済学はケインズ革命、計量経済学革命、一般均衡ないし形式主義の革命などといった多数の「革命」を経験したことが指摘できる。これらの変化をどのように特徴付けようと、オーストリア学派がそれらに参加しなかったことは明瞭である。もっと強く言えば、ハイエクやミーズのような人たちはそれに積極的に反対したのである。したがって、現在の経済学者(本書の読者の一部にそのような人がおられることを期待している)にとって、オーストリア学派を理解することは困難かもしれない。私の課題の一部は、オーストリア学派の伝統になじみのない人たちのために、彼らの意見を理解するのに必要な基礎知識を提供することである。

ハイエクの著作の分量も、研究者にとっての、もう一つの気が遠くなるような挑戦となる。ハイエクは一八九九年から一九九二年まで生き、執筆活動は七〇年間にわたっている。悪いことに、彼は信じられないほど多作であった。さらに悪いことに、彼は自らを経済学に限定することなく、心理学、政治哲学、思想史、社会科学方法論などの多様な分野において足跡を残している。「悪いことに」という言葉を私が使ったのはもちろん冗談である。というのは、ハイエクの魅力の一部は、彼があれば多くの分野で、時には重要な貢献をしたことにあるからだ。ハイエクを研究しようと思えば、自分の得意分野以外のものを読むことを余儀なくされて、それが自分にとっても解放をもたらす経験になり得るだろう。しか

し、専門的な訓練が重視される時代であって、彼を読むと自分の不十分さを感じずにはおられなくなり、彼の驚くべき守備範囲の広さを考えると、いくら控え目に言っても、彼の思想を評価する試みは危険なことにならざるを得ない。

彼を理解しようとしている人たちにとつてのさらに深刻な挑戦は、長年の間にハイエクが特定の物事に関して考えを変えているように思える点にある。言い換えると、彼の著作には矛盾が含まれているようにみえる、という事実が生じている。例えば、以下のようなことが見て取れる。ある一〇年間を通じて、ハイエクは、そもそも経済科学を学ぼうとするならいわゆる均衡理論と呼ばれるものが必須であるという意見と、均衡理論は市場システムの機能を理解するためには極めて誤解を招きやすいモデルであるという意見を、同時に抱いているように思える。同じ本のなかで、彼は、所得の再分配を目指す政策は法の支配に違反するとしながらも、それ自体が再分配の手段である「セーフティ・ネット」の提供を是認している。方法論的個人主義と群選択 (group selection) の両方を推奨しているが、これは往々にして相互に排他的だと考えられている立場である。もし、イデオロギーや他の論拠でハイエクと意見が異なるのであれば、その人にとってはこのような明らかな矛盾はもちろん問題ではない。彼を退ける論拠を提供してくれることで解決につながるからである。しかし、私のようにハイエクを理解して、彼の思考の動きについて妥当な解釈を提示しようと努力している人にとっては、そのような矛盾の存在は本当に困ったことである。

ハイエクに関しては膨大な二次文献があり、それがまた挑戦を生み出している。問題の一因は、ハイエク自身が評価の分かれる人物であって、今でもそうであるという事実に由来している。彼のことを研究している多くの人たちは、彼が正しかったのか間違っていたのかについて強硬な意見を持っており、それが当該研究者の解釈に影響を及ぼす。加えて、ハイエク全集に含まれている範囲が膨大であることを考えると、研究者は彼の業績のそれぞれ違った部分に依拠することになるため、解釈も多様にならざるを得ない。最後に、自分独自の理論を実体的に構築するための材料としてハイエクの著作を利用しようとする人がある。そういった場合、ハイエク自身が自分と同じプロジェクトに参画していると解釈してしまう誘惑に駆られる。その結果、ハイエク本人が一体何を考えていたかについては、非常にさまざまな解釈が存在することになるが、そうした傾向はおそらく他の著述家の場合よりも強いだろう。既に述べたように、私としてはハイエクの考

え方の変化について妥当と思われる解釈を提示したいと考えている。しかし私の仕事の一部は、二次的な文献のなかに存在する他の研究者の解釈と私自身の解釈を対決させるものになるだろう。⁽⁶⁾

(6) 本書の読者であるあなたは、ハイエクが言ったことや考えたことに関して、独自の先入観を抱いて本書を手にしたのかもしれない。私は読者にそういった考えを意識せずにおく、少なくとも括弧に入れておくように促したい。こうした手続きは、最低限でも読書体験に伴う欲求不満を軽くしてくれるだけでなく、世界の少なくとも一部を新たな目で眺める助けになる。それ自体は悪くない体験である。

別の一連の挑戦は、ハイエクが自分自身について語っていることと関係がある。ハイエクは時として講演や論文に自叙伝的な要素を混入させたり、インタビューに応じたりしていた。しかし、伝記的なことを開示する程度は、一九七四年にノーベル経済学賞を受賞して以降、劇的に変化した。その二三年後にハイエクは、カリフォルニア大学ロサンゼルス校による口述歴史プロジェクトの徹底的なインタビューに応じることに同意した。この面談は一九七八年後半に数週間にわたって行われ、合計九人の聞き手が彼に質問した。⁽⁷⁾対象になった話題は広範囲にわたり、質問事項を調整しようとはしていなかったようで、ハイエクは時には同じことを繰り返して述べることもあった。ハイエクは個人的な生活、学究生活、思想、時代、邂逅した多くの偉人やそれに準じた人々についての印象などを話した。その結果としての四九三ページに及ぶ記録 (Hayek 1983b) は、彼の生活や業績のあらゆる側面に関する素晴らしい情報源となっている。⁽⁸⁾

(7) インタビューを担当したのは、Amen Alchian, Robert Bork, James Buchanan, Robert Chtester, Earlene Craver, Thomas Hazlett, Jack High, Axel Leijonhufvud, Leo Rosten だった。

(8) 口述歴史 (オール・ヒストリー) のインタビューの一部は Hayek (1994) に所蔵されている。程度はさまざまであるが、それがハイエクに関する英語による二つの伝記的な著作——Raybould (1999) と Eidenstein (2001)——の源になる情報を提供している。